

“ヴィオリンの分類，保存，手入れにつて”

On the classification, preservation and repair of the violins

久保 不二郎

“ヴィオリンの分類，保存，手入れにつて”

ヴィオリンに関する本は、昔より数多く出版されている。次に紹介する A. バッハマン著「ヴィオリン百科」—Am Encyclopedia of the Violin 等もヴィオリンの百科全書として色々と分類された内容であるが、本稿は其中に書かれてないヴィオリンの識別法をテーマとしたい。先づ上記の本の内容について、著者バッハマンは1875年ジュネーブ生まれのコンサート、ヴィオリニストで、イザイやセザール、トムスンにヴィオリンを学び、ヴィオリン曲を幾つか物してる作曲家でもある。ヴィオリン関係の著書も多く、Le Violin (1906), Les Grands Violinistes du Passe (1913) 等がある、本書は、既に1925年に世に出たものであるが、その版に S. Canin の序文を付したダ・カーポ社版の1966年の単行本を更にペーパー・バック用に A. E. Wier が編集し直したものである。原文はフランス語であると思われる。訳者は F. M. Martens と成っている。本書は、元来シリーズ物として連続出版されたものであるせいか、項目は半ば羅列的、寄せ集めのものと成っている（本書が百貨店ならぬ「百科全書」（エンサイクロペディア）たる所以である）。因みにそれを順番通りに記せば、

- (1)ヴィオリンの起源
- (2)ヨーロッパのヴィオリン製作者
- (3)アメリカのヴィオリン製作者
- (4)ヴィオリンの構造
- (5)色とニス
- (6)ヴィオリンの弓—製作者と構造
- (7)ヴィオリンのブリッジ，弦，松脂の製作
- (8)ヴィオリン教授と練習
- (9)ヴィオリン奏法の発展
- (10) 演奏法
- (11)音色とその移り変わり
- (12)音色と様々なボーイング
ヴィオリン技巧の進展

- (14)弓の用い方
- (15)アクセントづけ乃至アタック
- (16)グリッド乃至ポルタメント
- (17)大ヴィオリン曲のアナリーゼ
- (18)ヨーロッパとアメリカにおけるヴィオリン修理
- (19)室内楽
- (20)レコードとヴィオリン
- (21)音楽用語集
- (22)ヴィオリニストの略歴表
- (23)ヴィオリン関係文献
- (24)ヴィオリン音楽の発展
- (25)ヴィオリン曲目録

等である。要するに楽器の構造，製作者，奏法，奏者，その作品，関係文献の地誌的，歴史的知識の辞引的総覧に分けられる。以上が「ヴィオリン百科」の内容ですがヴィオリンの識別については、項目がなく、今回のテーマにした次第です。1971年に泉清氏がヴィオリンの分類法について述べたのを参考資料として使用する。

(1)プラクティース・ヴィオリン

字のとおり練習用のヴィオリンのことである。これは、別名ビギナーズ、ヴィオリン即ち初心者用ヴィオリンとも呼ばれる最も安価な低品質の楽器である。プラクティース、ヴィオリンは、一般に板が薄く出来ているので、鳴りは案外良いのであるが、いたずらにポーポ、ビービーと鳴るだけで音に味がなく、もちろん遠音はきかない。楽器の音質の良否を見分ける方法の一つとして、遠くまで音が透るものが良いといわれてる。これを遠音がきくという。弾いてみればたちまち分かることであるが、弾かずに見分けるには次の点に注意する。

- (A)材料の木目が悪い。
- (B)指板，テールピース，糸巻などを染めたり塗装したりして材質がごまかしてある。
- (C)パフリングが描いてある。

- (D)駒が調整してない。
- (E)塗装の大部はラッカー仕上げである。
- (F)全体の形が粗雑で特に天神の仕上りが悪い。

(2)オーケストラ・ヴィオリン

オーケストラに使うことができる程度のヴィオリンという意味である。ヴィオリンという楽器は元来熟練者がコツコツと一人で作り上げてこそ初めて良い楽器ができてくるものである。ところが18世紀の初めに、当時のこの楽器の急激な需要に応えるために有名なクロッツという人がドイツのミッテンバルトでヴィオリンの大量生産を開始したのである。彼はヴィオリンの製造工程を分業化し、胴は胴ばかり、ネックはネックばかり、糸巻は糸巻ばかりというふうの下請けで作らせ、これをアッセンブルして大量のヴィオリンを製造する工場を作り上げたのである。現在でもミッテンバルトはヴィオリンの町として残っており、その後、同じドイツのマルキノケーヘン、クリンゲルタール、プーベンロイト、チェコのルビーなど村中あるいは町中をあげてヴィオリンを製造し、世界各国へ安価で優れた楽器を供給するようになった。

オーケストラ、ヴィオリンはこのようにして作られた大量生産の中級品である。ヴィオリン特有の楓の模様が見られ、部品も黒檀などの高級材が使われるが、しょせん大量生産の機械で作ったものであり、楽器としての面白味はない。音質も均一化はしているが、弾きながら音を整して作り上げた楽器ではないから音に味はない。

(3)コンサート・ヴィオリン

大量生産のヴィオリンの最高級のものである。コンサートに使えるあるいはコンチェルが弾くことができるという意味であろう。このクラスになると、十分にシーズニング（天然乾燥）された良質の材料を使って作られ、木目も美しく、塗装もヴィオリン本来のアルコール・ニスあるいはオイル・ニスが使用される。ただし、姿は誠に美しいが、音質はやはり大量生産であるために満足できるものは少ない。ヴィオリンは不思議に、必ず装作者の個性が音に出るもので、どんなに良い材料を使っても、また古来の名器の設計図に十分違わないものを組み立てても、分業で作る限り、絶対に良い品質のものではできないのである。

(4)コピー・オブ・オールド・マスター

現在まで残っている昔の名器、すなわち、アマティ、ストラディバリウス、ガリネリウスなどの作品をそっくりまねて作ったものである。材料も古くから保存され

ているものを使い、いかにも年月を経たように作られる。特にニスの古さによる変化、ハゲ具合、キズのつきぐあいなど巧妙に直似る。

また長年月演奏したヴィオリンは糸巻の穴が大きくなるのでこれをうめて新しく穴をあけかえるものであるが、最初から修理したように作り上げる。なお、16、7世紀の楽器は、その後必ずネックが取り替えられているのが普通であるから、わざわざバック、ボックスの下部に継ぎ目を作る。このようにして姿だけは昔の名器とそっくりに作ることもできても音を同じように真似ることは至難な業である。そのため、鳴る楽器もあり、鳴らない楽器もある。ただしヴィオリンの価値判断はその音質だけで決められるものではない。外観上の美しさと面白さが加えられるのである。特殊な高級家具などに古代塗りとよばれる仕上げのものがあるが、これと同様で、ヴィオリンもコピーすなわち模造品が好まれる場合が多い。この種の楽器は、決してダマそうとして作るものでなく、年月による変化の美しさを表現しようとしたものである、このクラスの楽器までは工場で作られるものである、したがってラベルはメーカー・ブランドが表示されるだけで作者のサインその他はない。

(5)マスター・ヴィオリン

マスターとは名匠のことである。ヴィオリンの製作には現在でもなお中世の従弟制度が残っており、ある年限以上の修業を了え試験をパスしないとマスターの位が得られないのである。

イタリア、チェコ、ドイツなどの多くの名器を生み出した国では、ヴィオリン・メカは殆ど世襲制で古来からの家系図が厳然と残っている。現在でもこれらの国の幾多の名工の子孫が生き残って手工業的なヴィオリンの製作技術を伝えている。これらの名工や巨匠たちが魂をこめて作り上げた楽器がマスター・ヴィオリンとよばれるもので、現在における最高の楽器なのである。

先祖代々から伝えられた技術と、長年月の間保存された最高品質の材料から作られるのであるから、いうまでもなく非常に優れた品質のもので、したがって値段も法外に高い。現在生き残っているマスターたちには高齢の者が多く、このマスター・ヴィオリンの技術は、日本の琵琶作りの技術がほとんど失われてしまったように、やがては失われてしまうのではないかとと思われる。マスター・ヴィオリンの場合は、ラベルに製作者の名前および製作年が明示されるのが普通であり、権威のある証明書がつけられる場合が多い、なおわが国にも欧州のマスターに匹敵するヴィオリン製作者が多い。

(6) オールド・ヴィオリン

大昔の名工の作った名器の現在までに保存されたものをオールド・ヴィオリンという。ただ古いだけではオールド・ヴィオリンではない。これらの楽器はすでに捜しつくされ、各国の博物館、演奏家、蒐集家などに集められ、社会主義国家では国家の財産として保存されている。そのため一般市場で販売されることはなく、イギリスのヒル商会、ドイツのハンマー商会など伝統的なヴィオリン商が取引を独占している。俗にコースト、ヴィオリンあるいは、セコンド・ヴィオリンハンドといわれる中古品には、全くのニセモノ、似せものらしきもの、本物らしきものなどの、エタイの知れないものが多く、売る側も求める側も価値判断ができない場合が多く、狐と狸の化かし合いのような状態が起きることがしばしばである。

(1)のプラクティーズ・ヴィオリンは、わかり易くいえば、日本の子供達が多く使用してる、鈴木ヴィオリンと思えば良い。他にもチェコのリグナートンや最近では中共工業公司製のものがこれである。近代企業で大量生産されたものは、たとえ価値があって便利なものでも、急速にその価値が減少する。

(2)と(3)のヴィオリンは、ドイツのハンミツヒヤロートや安い値段のカール、ヘフナー等が代表されますが、日本の学生や一般愛好家の殆がこの種類である。

(4)コピー、オブ、オールド、マスターは、代表的で有名なのは、カール、ヘフナーとか、チェコの楽器、東ドイツに多い。コピーも、ストラディバリ型（濃いブラウン・ニス。黄味あるブラウン・ニス。赤味のあるブラウン・ニス。濃いチェスナットブラウン・ニス）、グワルネリ型、ルジェリ型、ベルゴンチ型等、種類が多い。最近実際にあった例ですが、小生の友人がN響のヴィオラ奏者ですが、小生の所へ来て、ガルネリのヴィオラを講入したとって持って来たのですが、実はガルネリは生前に一つもヴィオラを製作していないのですから、始めよりコピである事間違いないので、その事を本人に話をしたら、ばれたらしょうがないが、実はこの楽器はアメリカでガルネリ氏がヴィオラを製作したら多分この様な型になるであろうとの想像でできた楽器だといっていました。これ等コピー・ヴィオリンの最も例です。

現在本物の証明書をもったストラディバリは約千個ほどといわれ、その半数以上は偽物といわれています。現在本物と確認されているものは、W. M. ヘンリー著「ストラディバリと彼の楽器」によれば、3百数十個のヴィオリンとヴィオラ、およびチェロの数十個といわれます。(コントラバスは製作しなかったという説と、5個作ったと

いう説とがあります。) 実は東京芸大にストラリバリのコントラバスが実在してるので、これが本物であれば5個の中の1個となるわけです。1963年8月、北イタリアのマジョーレ湖上の小島でストラディヴァリの展覧会がゼノアの美術愛好家エンリコ、コスタ博士の努力で催され、約40数点が展示された。会場の入口には警官が立つというものものしきで、現在東京芸大の所蔵となった1717年作「パーク」も展示されていましたが、当時からこの展覧会にはかなり多くの偽物がまじっていると取沙汰されてきました。ストラディヴァリの偽物のうち、1600年代のラベルをもった楽器で価値のあるものは、ベニスのドメニコ、モンタニア(1690-1750)の作であるといわれています。小生が近年西ドイツのボン市にあるベートーベン・ハウスを訪れた時、ベートンが有力なパトロンであったリヒノフスキー侯爵よりカルテットになる一組の弦楽器を贈られたのが展示されていましたが、最近わかったのですが偽物だったそうです。



Beethoven-Haus, Bonn

Streichinstrumente Beethovens.

Von links nach rechts, Viola V. Rugero (1690)

Vloloncello von A. Guarnerius (1675)

Viola and Beethovens Bonner Zeit,
sowie 2 Violien von N. Amuti (1690)
und G. Guarnerius (1718)

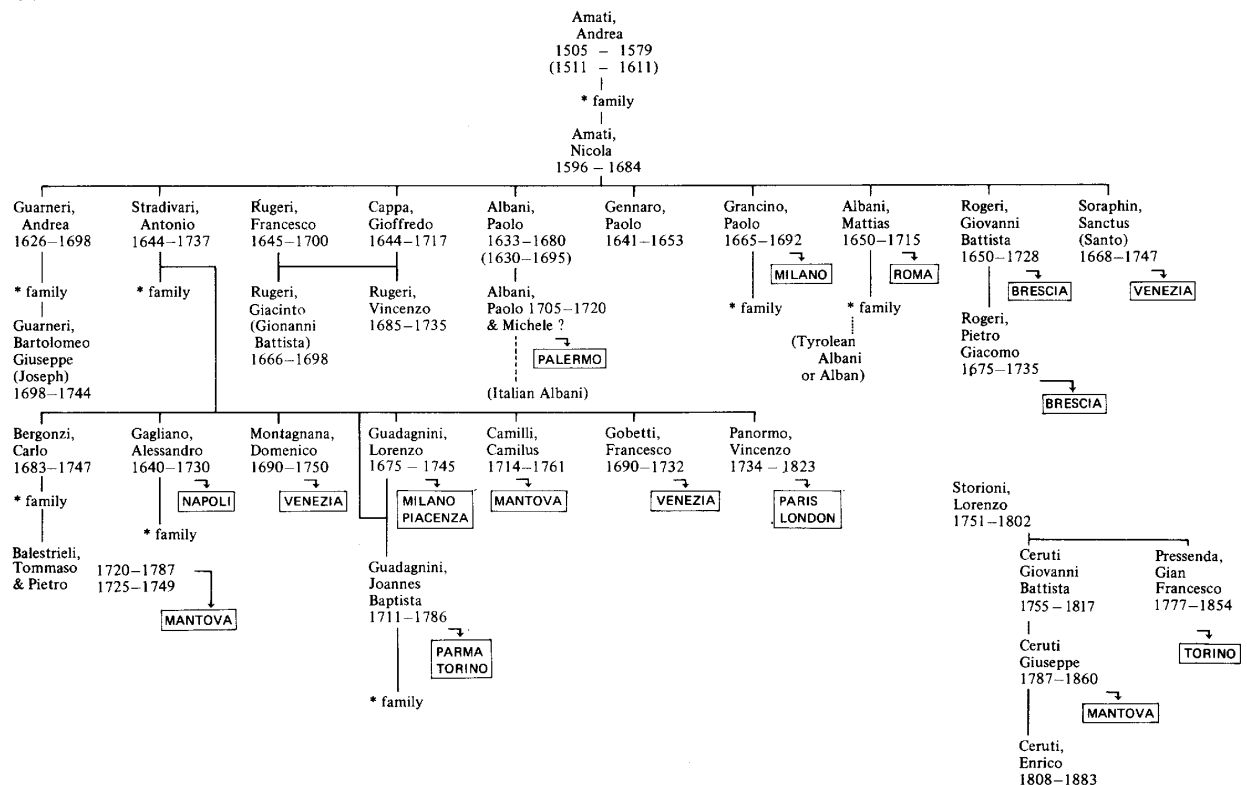
この様な楽器のラベルをつけていますが、ニコロ、アマテイ、1690年のラベルをもつヴィオリンは黄色の美しい気品のある作品ですがアマテイの自作品ではなく、G. ガルネリ1世1718年のヴィオリンは、フェーセンのヨハン・Aゲドラの作品で、このような偽造はだれのしわざか、ベートーベンの死後、甥のカールが行ったものか、あるいはリヒノフスキー侯爵から贈られたときすでに偽造されたラベルが附されていたものか、むろん記録もなく

真相はわかりませんが、ベートベン・ハウスに堂々と展示されて、見学者は全員本物と信用してます所に、わりきれない気持です。

(5)マスター・ヴィオリンは名器として現在数少なく残されていますが、ハウスリック氏がクレモナの名器ができあがって百数十年後の1867年に次のように言ってます「ストラディヴァリ、ガルネリ、アマティ、マッジーニなどの名器はその寿命という点ではまったくすばらしい楽器である。そしてこういう楽器の寿命はたぶん私たちの世代を起えてなお持続するであろう。しかしこの地球に生きるすべての物に通じる法則どおり、こういう名器にとっても必ず最後のときが来るだろう。私たち名手によって使われてるこういうクレモナの名器の多くは、すでに消耗の跡を残している。」イギリスの有名な鑑定家ヒル氏もクレモナの名器の寿命が近づいていることを警告してる「名器について真剣な話をしよう。楽器は絶え間のない使用によって疲れるものである。それらに休みを与えるべきだ。よい楽器を絶えず使用し、それによって名器を死に追いやることを防ぐことは私たちの重大な任務である。クライスラー氏はマスター・ヴィオリンの寿命について「小さいホールで奏くためにはストラディヴァリはすばらしい。ストラディヴァリが作られた当時は小さいホールしかなかった。ガルネリのほうがストラディヴァリよりずっと力がある。最近ある若いヴィオリニストがストラディヴァリを買いそれを演奏した。ところがい

い楽器なのだが、公開の場で以前より演奏効果をあげることが出来なかった。どうしてだろうか、と彼はさかんにいぶかっていた。答えは簡単である。現在のホールはストラディヴァリにとっては大きすぎるのである。」といったそうです。又コルネーグ氏は「イタリアのクレモナの名器が演奏会場で聞かれなくなる時代は、もはやそれほど遠い先のことではないだろう。名器は次第に疲れてきている」といってます。結論としては、大ホールの隅々にまで響きわたるような大きな音が出ないものは、名器でも寿命がきたもので第1線を退き、鑑賞用つまりオールドヴィオリンとして保存されるべきである。カール、フーア博士は「ヴィオリンの音響上の謎」(1926年刊)という本の中で次の様にこの問題について「中程度のヴィオリンは奏きこんでも、第一級の楽器になることはない新しい楽器が音が弱い場合は、2百年たってもやはり音は弱い。4つの弦の音が初めから平均していなければ、奏きこみをやっても、その欠陥を取除くことはできない。G線の音が力強く響かないとき、E線の音が弱いときや鋭いときもむろん同様で、そういう楽器をいくら長く奏きこんでも音は改善されない。この場合、もちろん駒とか魂柱その他をよく調整した、新しい楽器の奏きこみのことを言っている。新しい良い楽器は初めからすべてのすぐれた性質をもっていなければならない。こういう楽器は、初めは新しい木を鳴らしているように響くが、奏きこんでいるうちに木が振動に馴れて音が出しやすくな

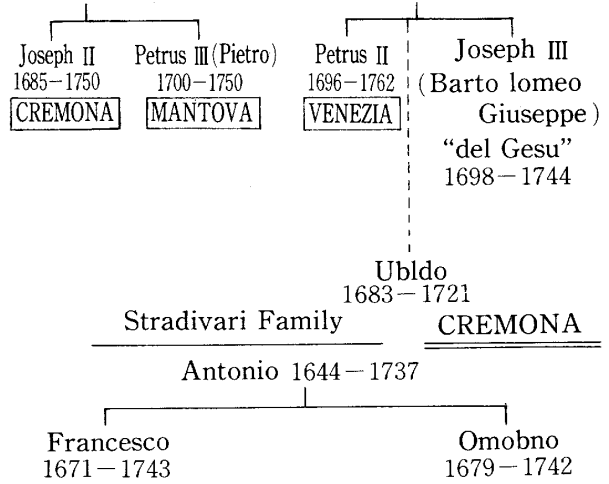
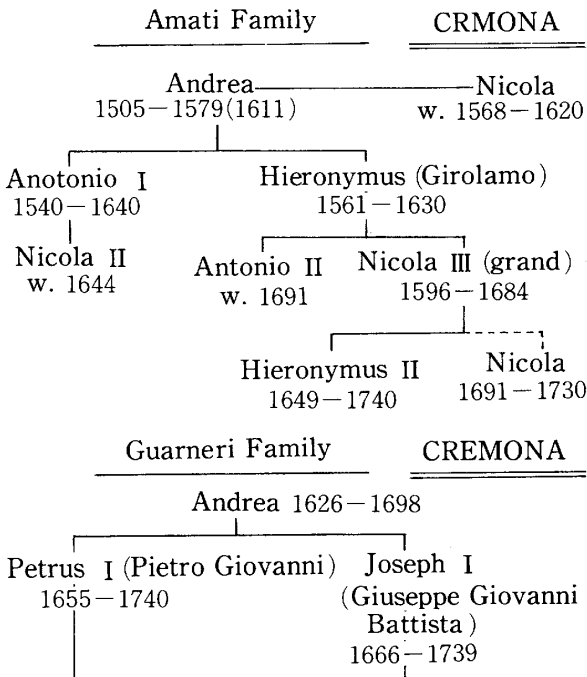
School of CREMONA (クレモナ派)



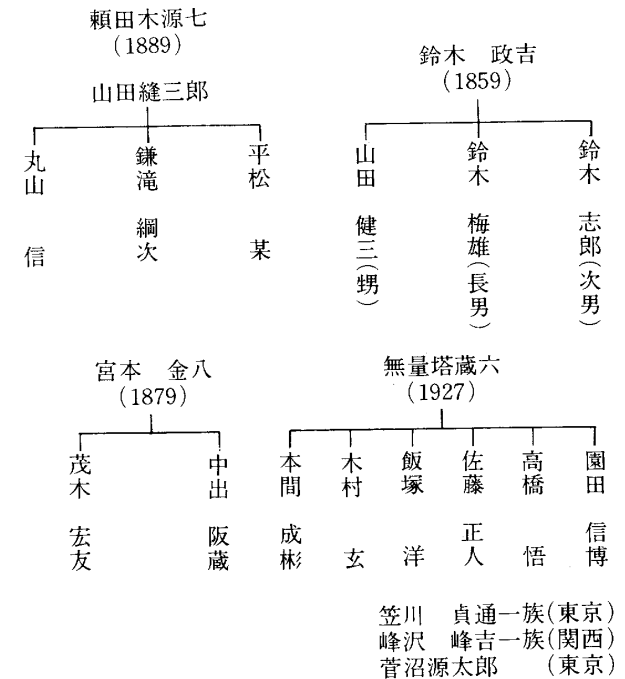
“ヴィオリンの分類, 保存, 手入について”

り、デリケートな音が出るようになる。ところで古い楽器は続けて奏く場合、木は絃の圧力に参ってしまうことがあるのでときどき休ませてやらねばならないが、新しい楽器はかなり長い間奏き続けても大丈夫である。新しい楽器の中には奏きこんでいるうちに音が悪くなるものがある。こういう楽器は大い初めの作りが悪いものである。つまり木が弱いものを使ってある場合が多い。こういう楽器の場合、出来たてのうち力は木や魂柱のおかげで、楽器は絃の圧力に耐えているから、初めのうちはいい音が出るのであるが、だんだんその圧力に耐えきれなくなってくると音が悪くなっていく。またニスがいいものを使ってないと、それがだんだん固くなってきて音が悪くなっていくこともある。ところがはじめからいいニスを使って正しく作ってある良い楽器は、奏きこんでいるうちにだんだん音がよくなっていく。そして部屋の中でも、演奏会場でも素晴らしい音を出すようになる。この結論は私が作った新しい楽器を実験した結果得たものである。」と云っている。またメレディス、モリス氏のようにストラディヴァリの音の秘密を探るために35年間も続けて研究してその結果を公表し、結論として「私はイタリアの音の秘密の研究を始めてから35年にもなるがこの問題の解決は、結局のところ現在一歩も前進していない。」と云っている。

(6)オールド・ヴィオリンに関しては、一番重要なことは、各人の系図であろう。前にのべましたが、この世界は世襲制度、徒弟制度で現在にきていますので、次に系図を示してみたい。各国色々な系列があるが今回はイタリアのクレモナ派のみをあげる。



日本のヴィオリン製作はやっと百年の年月になり現存する人、過去の人と努力した結果最近では素晴らしい楽器ができてきている。明治18、9年頃、のちの東京音楽校初代校長伊沢修二氏のすすめで、雅楽器を製作していた神田某がはじめてヴィオリンを作ったといわれています。「明治事物起源、下」(昭和19年刊)には東京深川の琴三味線製造業松永定次郎が、明治13年にニコライ堂の楽師デミチリーのヴィオリンを模して輸入ラシヤの外箱で作ったのがはじめてと書かれています。その後の日本人の製作者の系図を調べてみたいと思っていますが、実際上本当に困難で、というのは、戦災で資料その他が焼失され、その当時の製作された楽器は皆無です。



以上簡単ですが、外にも数多くの製造者がいますが、別の機会に調査したい。上記の頼母木源七一族は分類では大量生産の機械のプラクティース、ヴィオリンです。鈴

木一族は、ブラクティース・ヴィオリンとオーケストラヴィオリンとコンサート・ヴィオリンを製造した。又数多くのマスター・ヴィオリンも現存している。他の人は全部マスター・ヴィオリンで、いわゆる世界に一つしかない楽器を作っていますが、実際外国物とくらべての評価は大変むずかしい。外国の名器と全く同じ型、同じ作りで製作しても、名器と同じ音がするかというと、絶対に不可能です。昔より日本人は真似する事にかけては、世界一だとされてきてますが、この件に関するかぎり駄目です。ヴィオリンの名器かどうかは、何できまるかと昔より議論されてきていますが、材料かニスか型か等です。そこで、オールド・ヴィオリンのニスについてですが、2百年以上たった現在でも、輝しい美しさを保ってて、その研究は多くの人がしていますが、アメリカの研究家が書き述べたこのニスに関する形容があるので参考までに引用してみよう。

◦透明で燃え上がる炎のようだ

熟し切ったサクランボを思わせる明るい赤の色、マホガニーにも優る素晴らしい色調

◦ジューツと見つめていると底に沈んだ色が浮かび上がってくるように見える。

◦裏板や側板の楓に塗られたニスは光の波のようだ。
◦輝かしいシェーディング（色合い、明暗による色の違い、ヴィオリンの場合、技巧的に塗装の一部に影をつけたのをいう）は見れば見るほどそのかげりがあざやかとなる。

透明なニスをすかして見る木目は繊細な彫刻のよう
に浮かび上がって見える。

◦明るい窓側に持ち出せばニスは太陽のように輝き、
木目は今にも飛び出してくるようである。

すなわち、オールド・ヴィオリンのニスの色あいの美しさは、塗装する際の温度によって変わったらしく、明るく輝くイタリアの太陽が極めて重要な鍵で、現在みたい
にスモックの多い都会では良いものはできない。

ヴィオリンのニスの場合、一般の家具のニスと異なり、
美しさの上に音質を向上さす役目を果たすのであるから、
現在多く市販されている無機物の塗料は一切使うことがない。
市販のギターに使われている、ラッカー、メラニン、
ポリウレタンなどの塗料は、ヴィオリンにとっては無縁な
ものと考えなければならない。ニスの溶剤としては、
亜麻仁油（油画に使うリンシード、オイル）、くるみ油、
テレピン油、ラバント（地中海沿岸地方の唇形科植物）、
スピカラベンダー、まんねんこうなどの油、95%以上の
アルコールなどが使われる。

樹脂としては、松脂、ゴム樹脂、ベンジョワン（安息

香）樹脂、サンダラック樹脂、セラック、コパル樹脂、
エレミ樹脂、ダマール樹脂などの多くの種類のもので使
われ、色をつけるための染料（ステイン）としては、雌
黄、びやくだん、香錠、サフラン、ろかい、ラタニア、
竜血などのややこしいものが使われる。

ヴィオリンは、優れた技術で作りに上げた場合、白生地
のままでも清明な良い音が出るのである。むしろ生地
のままの方が音量は大きいといわれる。しかし生地
のまますなわち白木のヴィオリンでは、木部の表面が
空気中の水分を吸収し、また虫に喰べられるおそれ
が長くはもたず、その上衝撃に対して弱い。ニス
の塗装はこれらのおそれを防止する。また音質に
関しては、塗装すると、音質はやや減少するが、
高倍音を含む鋭い音色となる。塗装は色付け
（ステイン）と下塗りと上塗りに分けられるが、
とくに下塗りの場合に、そのニスの中に木の
ヤニを固めたり木質と融合する性質のものが
含まれていてはならないという。

イタリアのマスターたちの使用した下塗りのニスは、
特殊成分のもので、木材にしみ込みながらもなお、
木材が呼吸できるように、顕微鏡的粒子とな
って乾燥したと伝えられる。すなわち、表面
の塗装がハゲても、下塗りは残り、ていね
いにみかけば上品な光沢が残るという。結
局、イタリアのマスターたちは、ステインを
使わず、またテレピン油も使わず、本質
的に乾燥度のゆるやかなリンシード・
オイル（亜麻仁油）のオイルニスを
使い、これにアルコール・ニスを併用し、
樹脂としては竜血その他を使い、これ
に蜂ろう——蜜蜂がその巣のすきまを
詰める赤味がかった油性物質——を混
ぜたのであろうと解明されている。竜
血とは昔は竜血樹その他から採って
血止剤などの薬用に使われ、現在
ではマレー地方のヤシ科の植物
である。きりんけつ樹から採り
ニスの着色や防喰剤として使
われるものなのである。現在
のヴィオリンのニスには大別
して3種類のものがある。現
在の市場にあるヴィオリン
の塗装には次に述べる3種
類のものがあるが、この
ニスを識別することによ
ってその楽器の品質を見
極めることができる。

☆ラッカー —— クリアー、ラッカー、別名ニ
トログリセリン、ラッカーとよぶ、安物の
ヴィオリンに塗る塗料である。いうま
でもなく無機物であり楽器用として
は最低のもので主として練習用
ヴィオリンの塗装に使われる。
ダイナマイトの基剤や火薬の主
剤となる危険な物質の親セキ
で、最近ではその溶剤である
シンサーが青少年の不良化
をもたらすくらいであるから
ロクなものではない。

乾燥後は次第に硬化して音質を害し、年月がたつうち

にヒビ割れてくる。バナナのような良い香りの塗装はこのクリアー、ラッカー、間違いなく安ヴィオリンです。

☆アルコール、パーニッシュ

アルコールを日本語にすると清酒となる。アルコール、ニスにはさまざまなものがあるが、塗装が容易で乾燥が比較的早いので中級ヴィオリンに最も多く使用される。しかしオイル、ニスほどの光沢も出ないし、また柔らかさもないので音質的にも理想のものではないといわれている。なお塗装した際にアルコールが急速に蒸発するためニスの膜と木の繊維が完全に結合せず、ニスと別離したり亀裂を出したりするおそれがある。最も簡単なアルコール・ニスでも、セラック、雌黄ゴム、ベンジOWN・ゴムなど混ぜて作り上げる。市販のラック・ニスやコバル・ニスなどを買ってきてそのまま塗ったのではヴィオリンのニスとはならないのである。

☆オイル・パーニッシュ

オイル・ニスは非常にやわらかく、肉盛りも良く、しかもよく木部に密着してハゲにくく、さらに音質的にも良いので多くの高級ヴィオリンに使われるが、乾燥するのに恐ろしく長い期間を要し、いつまでたってもベトついてあまり気味のよいものではない。しかしその透明な美しさは素晴らしいもので、年代がたっても輝かしい濡れたような光沢を失わない。ドイツのマイネル氏がヴィオリンのニスをはがしてその重さを計ったら本体の重さの2百分の1であったという。意外にニスの厚さは厚いのである。そのため、やはり弾力性のあるオイル・ニスが音質的に好ましいのである。以上がニスの分類ですが良い楽器はすべてオイル・ニスでしめられているといって過言でない。

以上でヴィオリンの分類についてのべましたが、結論として、マスター・ヴィオリンやオールド・ヴィオリンは安い値段では入手困難であるという事と本物と偽物の区別はむずかしいことです。

ヴィオリンは弦楽器のうちでもっとも構造的に優れたものである。したがって正しい保存手入れ法を知っていて大切に取り扱いえばその寿命は極めて永いものとなる。しかし、楽器というものは、元来センシティブでフラツジールなもので、些細な取り扱い上のミスがその性能に重大な影響を与えることが多い。以下、ヴィオリンの日常の保存手入れ法について、例挙してみよう。

“ヴィオリンの保存手入れ法”

。温度と湿度の変化が大敵である。

弦楽器にとっては温度と湿度の変化が最大の悪影響をお

よぼすと一般にいわれている。不幸にして日本は弦楽器にとってもっとも悪い条件の気候をもっている。梅雨から夏にかけての高温高湿、太平洋沿岸地方の冬期の極度の空気の乾燥はヴィオリンの保存上最悪の条件である。また最近普及してきたエアー・コンディショナーもこの楽器に重大な影響をおよぼす。それでは温度と湿度がどのような危害をヴィオリンに与えるかを研究してみよう。一般に高温は湿度を伴い低温は乾燥を伴うのが普通である。

。湿度が高くしめり気が多い場合

- (1)木部が水分を吸収し、全体的に膨張する。そのためヴィオリンが変形する。
- (2) とくに指板が下って指板の端が近づいてくる。
- (3)したがって駒が高過ぎる楽器となる。
- (4) 弓毛が伸びて、極端な場合たれ下がり張力を失ってししまう。
- (5)極度に湿度が多いときは、ニカワが外れ、胴がバンクしたり、指板が外れたりして楽器全体がバラバラになってしまう。

湿度が低く乾燥した場合

- (1)木部と弦（ガット弦の場合）が乾燥して収縮し、そのため表板が割れ弦が切れる。
- (2)とくに指板が上がって指板の端が表板から遠ざかる。
- (3)したがって駒が低過ぎる楽器となる。
- (4)弓毛が収縮して極端な場合には切れてしまう。

ヴィオリンは湿度の低いヨーロッパの国で生まれた楽器である。したがってヨーロッパの楽器を日本へ持ち込んだ場合、湿度による故障がしばしば起こる。ヨーロッパのヴィオリンに使用するニカワは極めてウスく、日本の気候では剥離する危険が多い。そのためこれを接着し直す必要がある場合がしばしば起こる。とくにガット弦はまことに取り扱いの困難なものとなる。ガット弦は理想的な保存状態に置いても生命に限りのあるものである。湿度が高くて老老化するし、また、高温で乾燥した場所に置くとたちまち生命がつきる。そのためスペアの弦はできる限り小さいエアー・タイトの容器に入れて置かなければならない。ガット・オイルという急救薬のようなものもあるが、あまり効果はない。

なお、温度の急変……例えば冷たい戸外から暖かい室内に持ち込んだ場合……ヴィオリンはそのイントネーション（音程）に狂いがくる。ヴィオリンと弓を湿度から守るためには適当なケースやケース・カバーが絶対に必要なのである。ヴィオリンにもっとも適している温度と湿度は、華氏72度、湿度50パーセントであるとい

う。

○弦は張り放しがよい。

弦楽器の弦は、楽器を大切にするために、演奏の終るたびにゆるめた方がよい……という説と張り放しにした方がよい……という説があるが、ヴィオリンの場合、その構造も完璧なものであるし、弦の張力もさほど大きくはないのでチューニングをゆるめる必要は全くない。優れたヴィオリンのメーカーの場合、本体を組み立てる際に、弦の張力を考慮して、バス、パーの接着部のカーブあるいは指板の接着部のカーブを弦の張力に平均して反発するように加減するのだそうである。したがって、弦をゆるめることはヴィオリンのためによくもないといえる。ヴィオリンの弦は、チューニングをしてしばらく弾かずに置くと、自然にゆるむものである。ガット弦の場合は乾燥によって収縮して張力が上がる心配がないでもないが、元来張力も弱く、楽器の構造をおよぼす以前に自然に切断するのが普通である。結局、ヴィオリンの弦は、常時張り放しにして置いて、ときどきゆるめて本体を緊張から開放して休ませるのが理想であるといえる。人間の生活と同じようなものである。

○弦をゆるめなければならない場合。

次の場合は直ちに弦をゆるめなければならない。

(1)楽器の胴がバンクした場合。

通常、ニカワが部分的にはずれた場合は外見上は全くわからない。音が濁ったり、音質が変化した場合は表板と裏板の周囲を指の背でまんべんなく叩いてみる。濁音の出る個所はニカワが剥離している故障個所である。

(2)ベック・ボックス（糸蔵）にヒビが入った場合

糸巻と糸巻の穴が双方真円でないかあるいはその各々のテーパが違った場合は、ベック・ボックスにヒビが入る原因となる。このヒビは糸巻を差し込まないと発見できないもので、また知らずにそのまま使用するとヒビが拡大する危険がある。

(3)指板が外れかかった場合

ネックが外れかかった場合

この場合、指板の端が表板に近づき、駒が高くなって弾き難いものとなる。

(5)サウンド・ポスト（魂柱）が倒れた場合。

音の力が抜けるし、楽器を振るとコロコロと音がする。

(6)駒が欠けたり割れたりした場合。

(7)テール・ガット（尾止糸）が切れかかった場合

○修理に出す場合には次のことに注意しなければならない。

部品を取り替える以外の簡単な接着その他の修理でも絶対に専門家にまかせなければならない。とくにヴィオリンに使うニカワは弦楽器専用の特殊なものであるため、他の接着剤で上手に修理したものを再修理することは非常に困難な仕事となる。またヴィオリンを組み立てるには専門の道具（杵その他の正しい形や角度を決める道具）やクランプ（締め具、ヴィオリンの場合はあまり力が掛からないようにできている。）を使用しなければならず、優れた性能を保つためには絶対に専門の修理屋にまかせなければならない。不幸にしてヴィオリンを踏みつけたりしてバラバラにした場合、どんな小さなカケラでも拾い集めて修理屋に持って行かなければならない。ただ1カ所の小さいこわれた木片が失われたために、その楽器の価値が大きく下がることが多いのである。

○音の調整のできる技術者は極めて少ない。

ヴィオリンの音色が思うとおりに出ない場合の調整はまことに至難な技術である。ヴィオリンをうまく弾きこなす人は多いが、楽器の本質を知っていてそのヴィオリンの本当の音をうまく引き出すようにアジャストできる技術者は極めて少ない。それゆえ、ヴィオリンの完全な修理と調整をしようとするれば、必ず数少ない信用のある専門家にゆだねなければならない。フランスの有名なビョームというヴィオリン製作のマスターさえ、音を改良するために、何百台という貴重な古銘器を蒸気でむして、全部駄目にしてしまったという話が伝え残っているが、優れた楽器の製作が少なくなった今日、修理にはよほど気を配らなければならない。

○弦を取り換える際の諸注意。

ヴィオリンの弦はある程度使用すると、スチール弦はサビてくるし、ガット弦は指の当たる部分がちびて、ポジションが狂ってくるし、巻線はワイヤーが外れてくる。そのため音色も悪化するし、音程もくってくる。

○弦を新しいものに交換する際には次の諸点に注意する。

(1)古い弦を一度に全部取り外してはならない。すなわち、1本外すごとに新しい弦を1本つけるようにする。これは、弦の張力がなくなって魂柱が倒れないためとブリッジの位置をそのまま正しく保つためである。

(2)弦を糸巻の穴に通して正しく巻く方法はうす巻に向かって巻くこと。

(3)通常4本の糸巻と4個の糸巻の穴は互換性がない糸巻の太さ、穴の大きさおよびテーパはそれぞれ違うのである。それゆえ、糸巻の位置は絶対に変えてはならない。

(4)糸巻がしっくり止まり、またスムーズに廻るため

“ヴィオリンの分類, 保存, 手入れについて”

は両者のフィッチングが大切であるが、止らない場合はチョークをつけ、廻り難い場合は石ケンをつける。なお、イギリスのヒル商会で作った特殊なベック用のグリースも輸入されている。

- (5)弦も巻く際にブリッジの角度が変わらないように気を配る。
- (6)弦のブリッジの上の接着部分と指板のネックの所に石ケンをぬると弦のすべりがよくなり、切れるのを防ぐことができる。

○完全5度が合わないとき。

ヴィオリンは作音楽器であるから、他の楽器のように、調律が狂っているということはないはずである。しかし普通に弾いて音程が合わない楽器もある。まず、ヴィオリンの説明で最初に述べた寸法比率（メンシュアール）の合わない楽器……これは論外である。しかし、比率は合っていても、どうも弾いて音程の具合の悪いものもある。これを5度の合わない楽器という。ヴィオリンはいうまでもなく4本の弦を完全5度にチューニングする。ところが第1ポジションの小指（あるいは第2ポジションの人差指）を使って出す5度の音と隣の弦の5度の音とが一致しない楽器がときどき現われるのである。この5度の合わない楽器の音程不良の原因には、弦、指板、上駒、弦の張力の不均等などのいろいろな原因があるが、一番の早道は専門家に修理してもらうことである。

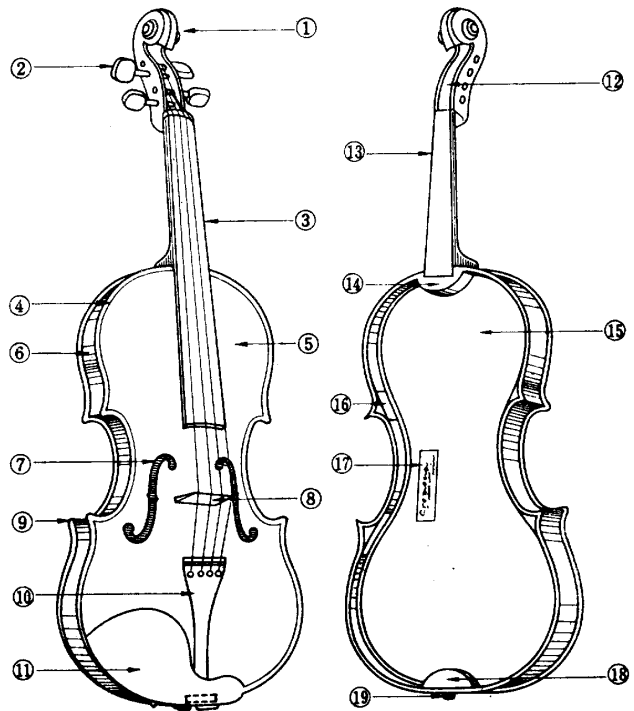
○ヴィオリンのトラブルの発生原因がどこにあるかを、Z. M. 氏の資料によると次の如く分類されています。

- (1)表板や裏板の材質が軟弱かつうすい場合。
根本的にシュパニングを持たないヴィオリン。とくにほほと呼ばれる部分が異常にうすいとき。
- (2)裏板や表板を取りつけているニカワが古くなり、はがれはしないが、なんとなく接着された状態にあるとき。この場合は、分解し、また元通りに組立てるだけで完全にトラブルを解消することができます。
- (3)象眼がゆるみ、象眼と板のあいだにすき間を生じたとき。
- (4)F 孔の先端のとがった部分に松脂などが附着して反対側とわずかに接触しているとき。
- (5)内部にある柱やライニングのあいだがはがれ、そこにごみが入ったとき。

以上のような場合にしばしばわずかしいトラブルが起きるのですが、なお理由の判然としない場合が多くあります。それらはケース・バイ・ケースで考えるよりほかに方法がないのですが、最近以外と多いトラブルにはプラスチック製の緒止弦を用いた場合です。これは安価なうえに非常に丈夫で、しかも取り扱いがかんたんであり、

わりあい体裁もよいので、ストラデヴァリなど名器にもよく使用されています。また音の響きが急にわるくなった場合は、楽器の中にゴミや不純物がたまった時によくトラブルがおきますが、それには、圧さく空気をF孔より入れて、他方のF孔よりそのゴミを出せば、響きがもとにもどります。以上で保存手入れについて終わります。

- 参考文献
- The Old Violin Makers.
 - The Violin Z. Murata
 - Violin Consultant K. Isumi.
 - Italian Violin Makers J. yarabetuku



①うず巻 scroll(e), Schnecke(d), volute(f) ②糸巻 peg, Wirbel, cheville ③指板 fingerboard, Griffbrett, touche ④象眼 purfling, Einlage, filefage ⑤表板 table(belly), Decke, table ⑥側板 ribs, Zargen, éclisses ⑦f 孔 sound-hole(F hole), F-Loch, ouies(less ff) ⑧駒 bridge, Steg, chevalet ⑨corner, Ecke, coin ⑩テルピース tailpiece, Saitenhalter, cordier ⑪顎当 chin rest, Kinnhalter, mentonnier ⑫糸巻箱 peg-box, Wirbelkasten, cheviller ⑬ネック neck, Hals, manche ⑭top-block, Oberklotz, tasseau du haut ⑮裏板 back, Boden, fond ⑯corner block, Eckklotz, tasseau du coin ⑰ラベル label(ticket), Zettel, étiquette ⑱lower block, Unterklotz, tasseau du bas ⑲エンドピン end-pin, Knopf, bouton

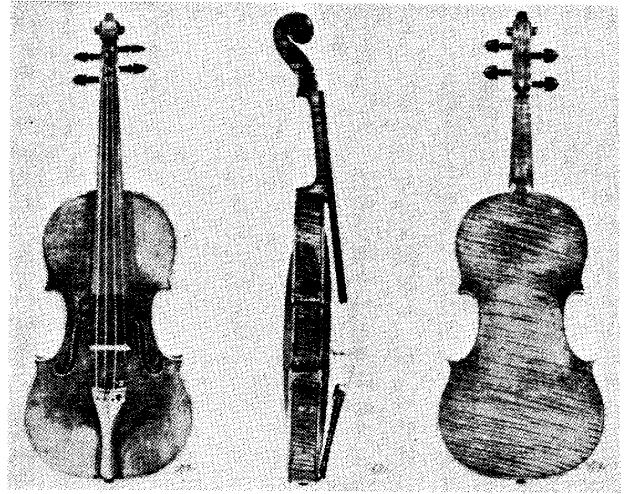
I certify dass die heute an Herrn Rudolf Loeb in Berlin
 Ich beglaubige verkaufte Violine eine der feinsten Arbeiten von
 Antonius Stradivarius in Cremona ist und dessen
 Originalmodell aus dem Jahre 1709 trägt
 Ho. König Maximilian

Description Das Instrument befindet sich fast völlig im
 Beschreibung Originalzustande, Organ da Lalo ist noch original
 Alle Teile sind erst und zusammengehoert, der Lack ist
 herrlich hell und von feinsten Qualität und sonst vollenden
 original. Über diese besondere Geige ist ein besonderes Merk von
 mir hervorgehoben, welche dessen Geschichte mit Beschreibung mit
 12 Klappenkarten enthält. Foto. Instrument

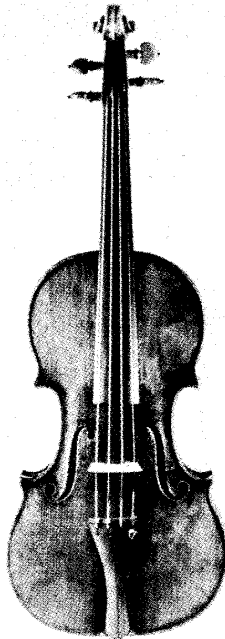
New York City 12 Sept. 1930.
 Berlin W 30

E. Emil Hermann

42915



バイエルンのマキシミリアン皇帝が所有していたストラ
 ディヴァリ 1709年にたいするヘルマン 1930年の鑑定書



Antonio Stradivari

Cremona

1717

"Ex Park"

(東京芸術大学所蔵)

